

## 活かそう「山形の蔵」

(株)マルシゲ代表取締役  
熊谷 一幸氏



私たちの住む山形には「蕎麦」、「山形牛」、「サクラランボ」といった全国に誇れる食と、芋煮会に代表される食文化があります。そしてもう一つ忘れてならないのは「土蔵(蔵)」です。かつての調査によると山形市内だけで1,000件ぐらい「ある」、もしくは「あった」と言われています。しかし、道路の拡幅や家を継ぐ方が山形の地を去り、処分せざるを得ない状況が続き、いつの間にか街の中から姿を消しています。それでも蔵とラーメンでまち興しをしている福島県喜多方市よりも多く、何とんでも漆喰彫刻や蛇腹の扉など豪華なものが少なくありません。

豪華さの理由は紅花商人の存在です。山形から紅餅を京へ出荷し、京からの帰り荷として古着など日用品を持ち帰り広く商いました。同時に京文化も運んできました。土蔵建築文化(左官技能)は、山形仏壇などと並びその代表格です。1894(明治

27)年、十日町・八日町・三日町・小姓町を焼き尽くした市南大火で土蔵のほとんどが灰燼に帰しましたが、受け継がれた左官技能が見事に蔵を再現し、さらには防火対策として蔵の存在がクローズアップされ新築されました。

私共の会社は左官工事業を中心に営み、文翔館天井漆喰、山形城東大手門復元、旧済生館本館復元、唐松観音堂復元、霞城公園高麗門・土堀復元といった歴史的建造物工事や商家では長谷川家、尾原家の蔵を、また、県庁舎、山形市庁舎、J R山形駅ビル、山形商工会議所会館といった新築工事を手掛けております。

そのルーツは明治28年に曾祖父熊谷清作が八日町で左官業を興したことに遡ります。祖父幸助が1960(昭和35)年(株)丸茂熊谷組として会社組織とし、1990(平成2)年に(株)マルシゲに社名を変更、私は平成17年に父幸雄の後を継いで社長に就任しました。創業から121年目を迎えます。

今、若い人たちは蔵にとっても敏感になっています。蔵の中でのジャズセッション、蔵を活かした蕎麦屋や喫茶店、ブティック、美術館など居心地の良いレトロな空間として捉えています。この動きを「歴史と文化のまちづくり」を目指している山形市が積極的に推し進めてほしい。優れた山形の左官技術の継承につながります。20年ほど前の試算では、蔵を新築するには1億5千万ほどかかるという数字が弾きだされました。いかに価値のあるものか、ということが分かっていただけではないでしょうか。

参考となるのは秋田県横手市の取り組みです。同市の中心部増田地区の商人が、明治から昭和期に築いた蔵と街並みを市民の共有財産として保存するとともに、まちなか観光の目玉にしようと保存条例を策定。国の重要伝統的建物群保存地区に選定されました。補修、修理を行政が支援し、個人ではなかなか守れない蔵を積極的に保存・活用しようという施策です。

NHK大河ドラマ「真田丸」のタイトル文字は飛騨の左官職人挾土(はさど)秀平氏が赤土を塗って削り取り文字を書いたものです。まさに職人業です。山形の左官職人も素晴らしい技術を守り続けています。山形の財産である蔵を残しましょう。本物の土壁と漆喰が塗ってある蔵で山形の酒を飲めば、それこそ贅沢な空間といえるのではないのでしょうか。

(山形商工会議所議員)